誓約

夏みかん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誓約

【Ｎコード】
Ｎ００１４Ａ

【作者名】
夏みかん

【あらすじ】
［あらすじ現在準備中］

第一話　契約

それは一本の電話から始まった。
「はい、毛利探偵事務所です。・・・え？コナン君のお母さんですか？・・・日本に？・・・はい、今代わります。
コナン君、お母さんよ」
「え？」
蘭に笑顔で受話器を渡されながらコナンは不信顔になる。
コナンの母親である江戸川文代は新一の母親の有紀子なのだ。
アメリカに住んでいるはずの有紀子がなぜ電話を掛けてきたのか・・・。
「もしもし？」
恐る恐る出てみると
「新ちゃ～ん、元気してた？」
といつもの天然さ（？）爆発な声の有紀子の声が聞こえてきた。
「母さん・・・、どうしたんだよ。突然・・・・・・・」
脱力しつつ傍に蘭がいるため声を潜めながらコナンは地で話す。
「今回は優作も帰ってきてるのよ。話があるらしいわ。新ちゃん、今日出てこられる？」
「わかった」
短く告げると電話を切った。
アメリカから両親が帰ってきていて会いたいと言っているから今日は泊まってくると蘭に告げると蘭は自分の事のように喜んでいた。
英理が出て行ったのがコナンと同い年だったときのため蘭は両親とはなれて暮らしているコナンを心配していたのだ。
（父さんまで帰ってきてるなんて・・・、一体なんだ？）
その時コナンはまだ気がついていなかった。
以前自分が父親と交わした言葉を・・・。

その日の夜。
「新一、アメリカに行くぞ」
久しぶりに会った父親からの第一声はコナンを混乱させるには十分だった。
「な、なんで突然！？」
「有紀子から聞いたぞ。だいぶ危ないことをしていたようだな？
以前言ったはずだぞ？『危なくなったらすぐに外国に連れて行く』と」
「！」
コナンはこの姿で始めて両親と会ったときのことを思い出した。
自分がどれほど危険な中に身を置いているのか解らせるために大掛かりな芝居をした人たち。
そのときに交わされた言葉。
あのときのことを言っているのだ。
「でも・・・、今日本を離れたらそれこそ組織の足取りが掴めなくなる」
「ほう・・・。根拠は？」
父親の顔から探偵の顔に優作はなる。
「コードネームだ」
コナンも負けずに探偵の顔となる。
「コードネーム？」
「『Ｖｅｒｍｏｕｔｈ』の読みだ。英語読みではヴァームース。でもコードネームで使われているのは日本語読みのベルモットだ。
ってことは本部が日本にいるって考えるのが自然だ。だから日本を離れられない」
コナンの必死の顔を見て優作は今回は折れるしかないことを悟った。
少し渋い顔をしながらも
「わかった。今回は見送ろう。しかし、組織が崩壊したら今度こそ外国に連れて行く。残党の心配があるからな。
これは譲れない。新一も『工藤』の人間なら言葉の重さはわかって

いるだろう？」
と譲歩を示す。
「・・・・・・ああ」
それにコナンは頷くしかなかった。

第一話　契約（後書き）

作者より
夏みかん：こんにちは、夏みかんです。
和葉：こんにちは、助手の和葉です。
夏：今回は工藤家にオリジナル設定を設けてんねん。
和：（次回を読みながら）めちゃめちゃあんたがはまっとった某漫画の影響受けまくりやな。
夏：マニアックやから知ってる人少ないと思うけどな。
和：あんまり『コナン』の世界観崩さんといてや？
夏：努力します・・・。

第2話　言霊

「全てが終わったらアメリカに行くってどういうこと？」
あの後博士の家に挨拶に行った後早々に帰国した両親と入れ違いに哀がやってきてコナンにたずねた。
訝しく思いながら哀は疑問を口にした。
いくら残党の心配があるからといってコナンがおとなしく蘭の傍を離れるというのが納得がいかないのだ。
「前父さんに言われたんだよ。『危なくなったらすぐに外国に連れて行く』って。
今回は何とか見逃してもらったけど全部終わったら行くって約束になった」
「たったそれだけのことで？」
哀の疑問に苦笑いをしながらコナンは言う。
「工藤の家系は代々古神道の巫女の家系なんだよ。
アメリカ育ちのオメエにはわかりづれえかもしんねえけど『言葉』には『言霊』っていう力が宿っていて『神様』の前で言った言葉は『契（うけい）』となって言い直しはきかねえんだ。
まあ、父さんは分家の一番下の子供だからわりと気侭に暮らしてるけどガキの頃から言われ続けてきた習慣が抜けねえんだろうな。
俺もそう言われて育ってきたから神様なんて信じてねえけど逆らえねえんだよ」
「そう・・・」
（でも、あなたがそういうのならなんとなく信じられるわ）
コナンの言葉に救われてきた哀は言葉に力が宿るという話を納得することが出来た。
「でも、一度向こうに行くといつこっちに帰ってこられるか分からないわよ？」
「ああ・・・、分かってるよ・・・」

（分かってるんだ・・・、そんなこと・・・・・・）
組織を崩壊させて”新一”の姿を取り戻せたとしてももう蘭の傍にはいられない事位分かってる・・・・・。
苦しそうな顔をして俯くコナンに哀はそれ以上何も言うことが出来なかった。

哀が帰っていった後コナンは自室のベッドの上で一人呆然としていた。
早くもとの姿に蘭を安心させてやりたい。
でも新一で会うということはそれ以降蘭と会えなくなるかもしれない。
「オレは・・・・・」
離れたくない・・・・。
でも、このままでいいわけがない。
（どうしろってんだよ・・・）
答などわかりきっている。
このまま真実から目をそむけることなんて出来るわけなんて無かった・・・。
（頭で理解しているのと心で理解するのって違うんだな）
自嘲気味な笑みを浮かべながらコナンは眠りについた。

第2話　言霊（後書き）

作者より
夏みかん：こんにちは、夏みかんです。
和葉：助手の和葉です。
夏：工藤家のオリジナル設定が出て来てもうたなあ。
和：これ、なんの設定かわかる人にはわかるんちゃうの？
夏：・・・まあ、ええやん。私この設定好きやし。
和：やっぱりあなたの趣味かいな。
夏：あはは・・・。

第三話　並び立つ者

コナンは携帯を見つめながら一人思案していた。
手に入れたメールアドレスと睨み合いながら阿笠邸のリビングで一人座っているのがここ最近の習慣になっていた。
（やっぱまずいよなあ・・・）
このときばかりほど自分の耳のよさに感謝したことは無いが今ほど消すに消せないものを持ってしまったことも無い。
（“工藤新一（オレ）の名前を出して警察に動いてもらうっていう手もなくはねえんだけど・・・）
しかしそれにはまだ時期が早すぎる気がした。
組織の実態もまだつかめていないうちから警察を動かすことはいくら工藤新一といえど容易ではない。
それにへたに工藤新一の名を出して蘭たちを危険な目に巻き込むわけにはいかなかった。
「誰のアドレス見とんねや？」
突如携帯を取り上げられ声をかけられたので驚いて振り返ると
「は、服部！」
そこには平次が立っていた。
「なんでオメーがいるんだよ！？」
「ジイさんがまたおまえが一人で悩んでるみたいやから大親友のオレに力になったってくれいうて電話があったんや！！」
嬉しそうな顔をして話す平次を横目に軽くコナンは博士を睨んだ。
博士はすまなそうな複雑な顔で笑っていた。
（これじゃあ、ジョディ先生のときと変わんねえじゃねえかよ・・・）
コナンは軽く頭痛を感じながらも平次を
「返せよ、携帯」
と言って睨んだ。

「それにしてもこれ誰のアドレスやねん」
いまだに携帯を話さないまま平次は同じ質問を繰り返した。
「誰でもいいだろう！いいから返せって！」
必死になって取り返そうとするコナンにからかうような笑みを見せながら
「教えてくれるまで返したらへ～ん」
と平次は子供っぽく言う。
それならこっちにも考えがあるといわんばかりにコナンは半目で麻酔銃を平次に向けた。
「はは・・・、冗談やんか」
苦笑しながら携帯をコナンに返した。
「まさかそれ、組織の連中の誰かのアドレスちゃうやろうな？」
さすが“東の工藤、西の服部”といわれる高校生探偵だけのことはある。
その直観力は侮れない。
「・・・服部、オメーはもうこれ以上入ってくんな」
真顔になってコナンは忠告する。
「・・・どういうこっちゃ」
少し怒った様な光を瞳に宿しながら平次は訊ねた。
「今ならまだ引き返せる。これ以上この件には首を突っ込むな。これはオレの事件だ」
「アホぬかすな。目の前で事件が起こっとんのにいまさら引き返せるかいな」
「バカ言ってんのはオメエのほうだ。奴らにこっちの存在がバレたら周りの人間全部消されちまうんだぞ？
自分だけじゃねえ、両親や和葉ちゃんまで殺されちまうんだぞ？」
「そんなん、お前かて一緒やんけ。姉ちゃんどないすんねん？」
「だから、そうならねえようにしてんじゃねえか！」
「せやったらオレもええやんけ！」
徐々に大きな声になりだした二人に冷静な声が割って入った。

「人の家で大声で喧嘩なんかしないで。工藤君も服部君も少しは冷静になりなさい」
哀の一言で二人は黙り込んだ。
「服部君、工藤君はあなたのことを思って言っているのよ？
私もこれ以上深入りすることは勧められないわ。今ならまだ引き返せる。
それでもついてくるというなら命の保障はしないわ」
「灰原！」
暗に深入りも了承する哀の発言にコナンは気色ばむ。
「工藤君、“探偵”ってどういう人種かあなたが一番よくわかってると思うけど？」
「それは・・・」
そう言われるとコナンには言い返すことが出来ない。
「それより工藤君、そろそろ帰った方が良いんじゃないの？彼女が心配するわよ？」
時計を見てコナンは「ヤベッ！」と呟いた後早々に阿笠邸を後にした。
その後姿を見送った後軽く溜め息をついた哀は
「・・・それと服部君、工藤君の性格は分かってるでしょう？
正義感に触発されて後先考えず、真実を追い求めていると思ったら誰も傷つけまいと一人でプレッシャーを背負い込んでいる・・・。
自分が傷つくことには疎いくせに周りが傷つくことは耐えられない。だからこそ彼は孤独になりやすいのよ。でもあなたなら無理矢理でも並び立てるでしょう？
彼を・・・、一人にしては駄目よ・・・・・・・」
「ああ・・・、せやな・・・・・・・」
平次はコナンの優しさゆえの危なさを知ってるからこそ一人で抱え込もうとするコナンに嫌がられてでもついていくつもりだった。

第四話　協定

組織に本格的に対抗するためにコナンたちはジョディの退院を待って全てを話しＦＢＩに協力を仰ぐことにした。
退院直後に哀に呼ばれて阿笠邸をジョディは訪れた。
「協力してくれるのね」
コナンが同席していたことに一瞬驚きの表情を見せたジョディだったがすぐに話を切り出した。
「ええ。ただし条件は二つ。絶対個人情報保護プログラムは受けない、捜査に私達も参加させる。
この二つを満たしてくれるのならね」
哀からだされたあまりにも無謀な条件にジョディは軽く溜め息をつくと
「しかたないわね。受けるわ」
と了承した。
「あなた達はベルモットの部屋で“私によく似た”写真を見たのよね？」
「ええ、そうよ」
「その写真、あるかしら？」
「ええ、ベルモットの部屋にあったもののコピーならね」
「見せてもらえる？」
「ええ」
そう言うとジョディは鞄の中から写真を取り出した。
それを受け取ってみた愛は軽く溜め息をつきやっぱりそうかという表情をしてジョディに写真を返した。
「・・・これ、私よ」
「なんですって？」
わけがわからないといったジョディの反応に当然だろうと哀もコナンも思う。

「言葉で言っただけじゃあ、信じられないのは当然よね。百聞は一見に如かずって言うしね」
そう言うとポケットからカプセルを一錠取り出した。
「は、灰原！？」
そんな哀の行動に焦ったのはコナンの方だった。
明らかに解毒剤の試作品とわかるそれを何も説明していない相手の前で飲もうとしているのだから。
「大丈夫よ。死にはしないわ。こうでもしないと信じられることではないでしょう？
まあ、見ていて気持ちのいいものではないけれどね」
コナンは不承不承といった表情で納得した。
何が起こるのかと困惑した表情のジョディの目の前で哀はカプセルを飲んだ。
「あああああああ・・・！」
苦渋の顔のまま目を逸らさないコナンと驚きために目を逸らせないジョディの目の前で哀は志保に戻った。
あらかじめ用意して会った服を志保がいるのをどこか呆然と見ながらジョディは混乱した頭を整理しようとしていた。
「・・・納得してもらえたかしら？」
元に戻ったばかりのからだはまだだるく疲れていたがそんなことは言っていられないためにポーカーフェイスで聞き返す。
「・・・ええ。これ以上の証拠は無いわね。でもあなたと一緒にいるってことはｃｏｏｌ　ｋｉｄも・・・」
「ええ。工藤新一です。あなたが潜入していた学校の生徒ですよ」
コナンはすっかり仮面をとり新一として語った。
「成る程・・・。それでベルモットの部屋のあなたの写真にｃｏｏｌ　ｇｕｙと書かれていたのね」
「ええ。ベルモットはオレたちの正体に気づいていますから」
あまりにも危機感の無い言葉にジョディは少し呆れはしたがそれでも意思の硬さはわかっていたから敢えて何も言わなかった。

「工藤君はわかったけれど、あなたは一体何者なの？」
ジョディに尋ねられ志保はポーカーフェイスで言った。
「私は元組織の一員。コードネームはシェリーよ」
「なんですって！？」
突然の展開にジョディは驚きを隠せない。
「私は組織の中で今私達が取り込んでいる薬ＡＰＴＸ４８６９の開発をしていたの。
この薬はのアポとはアポトーシス・・・つまりプログラム細胞死の事・・・。
そう・・・細胞は自らを殺す機構を持っていて、それを抑制するシグナルによって生存しているってわけ・・・。
ただ、この薬はアポトーシスを誘導するだけじゃなく、テロメアーゼ活性も持っていて細胞の増殖能力を高める・・・。
だから私達は幼児化したってわけ。もっとも薬の動物実験の段階で、幼児化したのは一匹だけ。
普通だったら体内から毒が検出されずに死んでしまうわ。だから組織も試作段階のこの薬を暗殺用に使っていたのよ」
「灰原」
ここで突然コナンが志保の話をさえぎった。
「お前もそろそろ俺達に本当のことを話してくれてもいいんじゃねえか？」
何のことだという表情の志保に淡々とコナンは告げる。
「お前最初逢った時言ってたじゃねえか。『毒なんて作ってるつもり無かった』って。
てことは今オメエが言った毒としての作用の方が本来は副作用なんじゃねえのか？」
「良くそんな昔の話覚えてたわね・・・」
半ば驚きと呆れが入り混じった声音で聞かれコナンは少しいじける。
「バーロ、探偵なめんなよ」
コナンの言葉に軽く溜め息をつきながら志保は肯定の言葉を発した。

「その通りよ。私は亡くなった両親から研究を引き継いで若返りの薬を開発していたの」
志保の言葉に驚いたのはジョディである。
「じゃあ、ベルモットは・・・」
「ええ、あなたの想像通りＡＰＴＸを飲んでいるわ。そのときのデータもちゃんと残っているはずよ」
「それにしても若返りのために命までかけるか？」
理解できないといった感じのコナンに志保は容赦が無い。
「あら、『日本警察の救世主』と呼ばれるあなたが女心をわかってないのね」
「・・・悪かったな」
少しふてくされたようなコナンの表情と声に軽く笑い志保は
「でも、ベルモットの場合は１００％近く大丈夫だったのよ」
と告げた。
「「え？」」
あまりにも意外な言葉にコナンとジョディは聞き返す。
「アポトキシンを染み込ませた培地で彼女の細胞を培養したのよ。そうしたら細胞は死滅するどころか盛んに細胞分裂を繰り返したわ」
「それで確信を持って飲んだってわけか」
「ええ」
「貴重な情報に感謝するわ。でも、正直なところこちらとしては打つ手が無いのよ。
向こうが何か仕掛けてくるのを待つしかないんだけれど・・・」
「ああ、それなら手が無いわけでもありませんよ」
コナンが不敵な笑みを見せていった。
「何？」
「組織のボスのメールアドレス」
「「なんですって！？」」
携帯のメールアドレスを見せながら放たれたコナンの言葉に二人は驚きを隠せない。

「まあ、オレの記憶で打ったアドレスだから１００％正しいっていう保障はねえんだけどな」
苦笑いをするコナンだったがそれでもジョディは
「いいえ、何も無いよりはいいわ。これを基にして調べさせてもらうわ」
と言った。
こうして事件は徐々に動き出した。

第五話　別離

数ヵ月後ジョディからアドレスの持ち主の住所を聞いたコナンと哀は動き出すことにした。
場所は鳥取県倉吉市。
東都から鳥取の拠点を探すわけにも行かずコナンは平次に頼むことにした。
「服部、悪ぃんだけど鳥取県の倉吉周辺で隠れられそうな場所見つけてくれねえか？」
『わかった、押さえられたらすぐ連絡するわ』
「ああ、頼む」
一ヵ月後平次から連絡を受け二人は転校する事にした。
不自然にならないようにまず哀が転校しその一ヵ月後にコナンが転校することにした。

「今日は皆さんに残念なお知らせがあります。明日灰原さんがカナダにお引っ越しすることになりました。
だから皆さんと一緒にお勉強するのが今日で最後になります」
「「「えええ～！！！」」」
何も聞かされていなかった少年探偵団の三人が殊更驚いていた。
特に光彦は複雑な表情をしていた。

休み時間
探偵団の三人が哀の席を取り囲んだ。
「哀ちゃん、本当に行っちゃうの？」
「今まで黙ってるなんて水臭えぞ。灰原」
「そうですよ、灰原さん。こんな突然・・・・・・」
三人が口々に言う言葉に哀は少し申し訳なさそうに微笑んだ。
「ごめんなさい。でも、決まったのが本当に突然だったのよ。向こ

うに住んでいる祖母が“一緒に住まないか”って言ってくれてね。博士は私の好きなようにすれば良いって言ってくれたし。いつまでも父の知り合いだって言う理由だけで他人の博士にお世話になっているわけにも行かないから行くことにしたのよ」
「でも、前に灰原さん言ってましたよね。東洋系の顔でイヤガラセをされてたって・・・」
言い募る光彦に哀は少し困った顔をする。
「ええ、だから今回は日本人学校に行くことにしたのよ」
「そうですか・・・」
残念がる光彦に哀は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。
「お前らあんまり灰原を困らせんなよ」
コナンの一言に三人は気色ばむ。
「何よ、コナン君は灰原さんがいなくなっても良いわけ？」
「コナン、冷てーぞ！」
「コナン君は灰原さんがいなくなっても寂しくないんですか？」
三人の言葉にコナンは苦笑する。
「誰もんなこと言ってねえだろう？でもこれは灰原が自分で決めたことだ。それをとめることは俺達には出来ねえよ。だったらせめて笑顔で見送ってやろうぜ？それにどこにいたって友達には変わらねえだろう？」
「そうだね」
「そうだな」
「・・・そうですね」
三人はコナンの言葉に納得した。
「哀ちゃん、元気でね」
「向こう行ってもちゃんと食うんだぞ」
「僕達のこと忘れないで下さいね」
「ええ。短い間だったけど楽しかったわ。忘れないわ、あなたたちのこと。今までありがとう」
哀の素直な言葉に歩美は泣き笑いになり元太は嬉しそうな顔をし光

彦は複雑な顔をし、コナンは驚いたようだった。

三週間後

毛利探偵事務所に一本の電話が掛かってきた。

「はい、毛利探偵事務所です。・・・あ、コナン君のお母さん。お久しぶりです。・・・え？コナン君ですか？はい、すぐ代わります。コナンく～ん、お母さんから電話よ～」

「はーい！」

蘭の呼び声にコナンが顔を出した。

「ありがと、蘭姉ちゃん。もしもし、お母さん？どうしたの？・・・・うん、・・・うん・・・え？でも・・・、そんな突然・・・。うん、わかった。

行くよ・・・。ううん、自分で言う。うん、じゃあね」

電話を切るとコナンは途方に暮れたように立ち尽くしていた。

「コナン君、どうしたの？」

いつに無いコナンの様子に蘭が心配になって尋ねる。

「え・・・？うん・・・・・・」

しばらく言うのを躊躇っていたコナンだったがじっとコナンの言葉を待つ蘭に視線を合わせると意を決したように口を開いた。

「あのね、お母さん倒れちゃったんだって・・・。今は大丈夫なんだけどね、でね、寂しいから帰ってきてってお母さんが・・・」

最初は蘭の顔を見て話していたコナンだったが段々と視線が下がって最後には俯いてしまっていた。

「・・・アメリカに行っちゃうの？」

「うん・・・、やっぱりお母さん心配だし・・・・・・」

コナンの言葉に蘭は寂しさを感じはしたが自分がコナンくらいのときに母親が出ていき寂しい思いをしたので

「そっか。ご両親と住めるんだもん。良かったわね」

と笑って言った。

「いつ行くの？」

「来週の火曜日」
「そんなに突然？」
「うん、ごめんね」
謝ってばかりのコナンに蘭は慌てる。
「ううん、謝らないで。でも、手続きとか大変ね」
「お母さんが博士に全部頼んでくれるって言ってたから大丈夫だよ」
「そう」
蘭は笑っていたけれどやはり少し寂しそうだった。
（ごめんな・・・、蘭・・・・・・）
蘭が“コナン”のことを本当の弟のように思っているのは分かっていた。
それでも“コナン”は偽りの存在であり実態の無い幻。
この世にいるはずの無い存在だ。
でもその存在は蘭と共にあまりにも長い時間をいすぎた。
“コナン”の存在を消してしまうことを赦してほしい。
（絶対帰ってくっから・・・）
“新一”の姿で君の前に・・・。
たとえそれが一時だとしても・・・・・・。

一週間後
「今日は皆さんに残念なお知らせがあります。明日江戸川君がアメリカにお引っ越しすることになりました。
だから皆さんと一緒にお勉強するのが今日で最後になります」
「「「ええ～！！！コナン君も？？？」」」
三人は大騒ぎだった。
休憩時間
「コナン君までいなくなっちゃうなんて・・・」
「突然すぎだぜ」
「そうですよ」
落ち込む三人にコナンは苦笑した。

「灰原が転校した時に言ったろう？“どこにいても友達だ”って」
「そうだけどよー」
「そうですけど」
歩美は一人黙ってそのときのことを思い出していた。
そうしていたかと思うと突然笑みを見せて
・・・うん、そうだよね。コナン君元気でね。私達の事忘れないでね」
と言った。
「（歩美ちゃん・・・）ありがとう。絶対忘れねえよ」
「うん」
「元気でな」
「元気で」
こうしてコナンは帝丹小学校を去っていった。

次の日
博士がコナンを迎えに来た。
「おじさん、蘭姉ちゃん、今までありがとうございました」
そういってぺこりとお辞儀をした。
「ああ、元気でな」
「うん」
口では邪魔だとか言いながらも実はコナンの事を気に入っていた小五郎は少し寂しさを滲ませながら言う。
「コナン君、元気でね」
「うん、蘭姉ちゃんもね」
「そろそろ行くかの」
時計を見ていた博士がコナンを促す。
「あっ、ちょっと待って」
そう言うとコナンは蘭にだけ聞こえる声で
「新一兄ちゃん絶対帰ってくるから、だから、だからね」
「うん、待ってるよ。ずっと」

蘭が言うとコナンは安心したような顔をして博士の車に乗って去っていった。

第五話　別離（後書き）

お久しぶりです、夏みかんです。
小説の中に出てきたコナンとお母さんの会話は全てコナンの自作自演！
策士ですな・・・。

第六話　切り札

鳥取県倉吉
ここからコナンにとっては全てを取り戻すための哀にとっては全てを振り切るための戦いが始まる。
コナンの探り当てたメルアドからＦＢＩは所有者を探り当てていた。
その人物はとある製薬会社の会長であった。
「この人って今は現役を退いて息子に会社を譲ったんじゃなかったかしら？」
哀の言葉にジョディは満足げに微笑む。
「そう、表向きはね」
「裏社会ではまだまだ健在ってわけか」
呟くようにコナンが言う。
「そうなるわね」
ジョディの返答を聞くとはなしに聞いていた。
（それにしてもわからねえ・・・。板倉さんは一体どんなシステムを開発したんだ）
コナンが一人思案にふけっていると哀の声が割って入った。
「持ち主がわかったのはいいけれどこれから如何するの？」
哀の意見はもっともだった。
「今回だけは特別にＣＩＡとも協力して捜査を行うことになった」
声が三人の話に割って入った。
「ジェイムズ」
「「え？」」
ジョディが呼ぶのとコナンと哀が聞き覚えのある声に振り返ったのはほぼ同時だった。
「紹介するわ。彼はＦＢＩの捜査官のジェイムズ・ブラックよ」
「久しぶりだな。Ｉｒｒｅｇｕｌａｒｓ。いや・・・Ｈｏｌｍｅｓと呼ぶべきだったか」

「ジェイムズさん・・・！」
コナンと哀は驚きのあまり言葉が出ない。
「あら？知り合いなの？」
「ああ、前に話しただろう？Ｐａｕｌ＆Ａｎｎｉｅを見に行ったときに事件に遭ったと言っただろう？」
「ああ、あのときの」
二人を見ながらコナンは
（ハハハ・・・、コレクターとゲーマーか・・・。なんかすっげえ不安になってきた・・・）
と半目で乾いた笑いを漏らしていた。
「ＣＩＡと協力するなんて珍しいこともあるのね」
哀が先ほどのジェイムズの言葉に素直な感想を漏らす。
「背に腹はかえられんからな」
苦々しげに言うジェイムズを見て哀は
（まだ確執があるのね。…そんなことで大丈夫かしら）
とコナンとは違う心配をしていた。

その夜哀はベランダに出てどこを見るとはなしに眺めていた。
「なあ」
後からコナンが突然呼びかけた。
不意のことだったので哀は驚いたのだがそんな素振は少しも見せずにいつもの余裕の笑みをたたえて振り返った。
「何か用？工藤君」
「用が無きゃわざわざ呼ばねえよ」
いつもの憎まれ口のたたきあい。
その空気も哀は好きだったしコナンも素の自分を出せる数少ない場だったので嫌いではなかった。
「お前、組織のことでまだ隠してることあんじゃねえか？」
「どういうこと？」
少し眉を寄せて哀が尋ねる。

「謎があまりにも多過ぎるんだよ。
一つ目は板倉さんの開発していたプログラム。人類のために諦めたと本人は日記に書いている。
二つ目は板倉さんの交渉をした女の科白。『時の流れを捻じ曲げて死者を蘇らそうとしている』
三つ目は前にお前が言っていた事だ」
「私が？」
「ああ」
哀は記憶を呼び起こすために軽く目を閉じて思案した。
それでも思い出せなかったので直接尋ねることにした。
「思い出せないんだけど、何か言ったかしら？」
「『時の流れに人は逆らえない。それを無理やり捻じ曲げようとすれば人は罰を受ける』」
「…それがどうかした？」
「『罰』ってなんだ？」
コナンは二人しかいない上に回りくどい言い方をしても無駄だと思って単刀直入に聞くことにした。
「不老不死なんてことをしようとすれば必ずどこかに“歪”が生じるわ。
急な若返りにからだがついていかない場合も考えられるのよ。そのことを言っただけよ」
「他には？」
「…工藤君、組織の人間全員が上の考えを知っているわけじゃないのよ？」
哀は呆れ顔で言う。
「そりゃあそうかも知れねえけど、お前はコードネームを持ってたんだろう？
だったら末端の人間じゃなくて幹部に近い人間だったんじゃねえのか？」
コナンの言葉に哀は軽く溜め息をついた。

「確かに私はコードネームをつけられていたし、研究チームの核にはなっていたわ。
でも全てを聞かされていたわけではないのよ」
「…そうか」
納得してないような顔をしていたがそれ以上は聞いても答えないだろうと思い諦めた。
「あんまり外いると体冷やすから早く中入れよ」
「あら、優しいのね」
「お前なあ…」
呆れた声を出すコナンに哀はクスッと笑って
「おやすみなさい」
と言った。
「…ああ」
コナンは中に入っていった。
（…これだけあなたを巻き込んでおいてそれでもあなたに関わってほしくないと願ってしまうなんて私もばかよね）
哀は自嘲の笑みをこぼしてコナンの後姿を見送った。

翌朝
コナンと哀はジェイムズたちの話を聞いていた。
「昨日ＣＩＡと協力するって言ってたけれど具体的にはどうするの？」
と哀は質問した。
「彼らが表向きの企業の方に潜入しているわ。これがその会社の見取り図よ」
そしてジョディが見取り図を二人に見せた。
「そしてこれが計測値。これで見る限り全く普通なのよ。本拠地はまた別にあるのかしら？」
とジョディが助言を求めた。
「…私にも異常は無い様に見えるわね。

でも私がいた組織の研究所も普通の企業の中に在ったからこの会社のどこかにあると思うんだけど…」
と哀は言いながらコナンを見た。
「…いや、このデータ変だ」
顎に手を置き考え込んでいたコナンはそう言い出した。
「どこがおかしいの？」
と哀が聞いた。
「これ一部屋一部屋の広さとか廊下の長さとかもちゃんと記録されてるからわかったんだけどさ、部屋同士の縦の長さと廊下の長さが全然合わねえんだよ」
「どういうこと？」
哀が解らないという顔をする。
「壁の厚さとかを考えても廊下の広さからしたら大分真ん中の方に空白があんだよ」
「じゃあ、そこに…？」
「ああ、おそらくな」
そんなコナンの様子を見てジョディは
（…恐ろしい子。私達とＣＩＡの調査部が考えても発見できなかった矛盾をこんな短時間で見つけてしまうなんて）
と思った。
「それで？これからどうするの？」
哀がコナンに尋ねた。
「オレに聞くなよ。…っていうかちゃんとしたこっちの戦力を教えてもらえないとなんとも言えないんですけど？
ジョディ捜査官？」
コナンの言葉にジョディは軽く溜め息を吐いた。
「…本当に作戦に参加するつもりなの？」
「当然よ」
「ああ」
ジョディの言葉に二人は当然といった面持ちで言葉を返した。

「命にも係わることなのよ？よく考えたの？」
諭すように言うジョディに哀はつまらなそうな顔をした。
「私にとっては自分の人生が掛かっているのよ？それこそ生れてきた頃からのね。それなのに他人任せになんかできないわ」
「俺だって元は自分の不注意からこんなことになっちまったんだ。自分の不始末くらい自分でつけるよ。
それに死ぬ可能性があるなんてのはわかってるよ。でも俺は死んだりしない。…やらなきゃなんねえことがまだあんだよ」
コナンが瞳に絶対的な意志の強さを乗せていった。
「それに誰かさんも待ってることだしね」
哀が暗に蘭のことを示してからかう口調で言った。
「……悪かったな」
コナンが照れから顔を赤くして視線を逸らした。
その姿は拗ねている様にも見えて小学一年生の外見とあいまってとても可愛らしく見えた。
そんなコナンの様子に哀は少しだけクスッと笑った。
「なんだよ」
それに気づいたコナンが拗ねた視線を投げかける。
「別に」
口元に笑みをたたえながらも哀は何事もないようなそ知らぬ笑みで応えた。
そんな二人にジョディは軽く溜め息を吐いた。
この二人の言葉は時としてどこまで本気なのかわからない。
（軽口で応えているようで瞳が真剣だったから全て本当なのだろうけれど…。
組織の大きさを理解していてここまで余裕な態度を取れるなんて大物かバカのどっちかね）
そんなことを考えていた。
「で、いい加減教えてほしいんだけど？」
「何をかしら？」

コナンの質問はわかっていたが敢えてジョディは惚ける事にした。
「もう隠す必要はないだろう。そこまで言っているんだから…」
その時扉の向こう側から聞いたことの無い声が割って入ってきた。
「シュウ、あなたが会うのはまだ早いって言ったんじゃない」
出てきた男にジョディは苦笑を浮かべながらも苦情を言った。
扉の向こうから出てきた男は黒いニット帽の男―赤井秀一だった。
「あ、あなたは…！」
“赤井秀一”！」
思いもかけない人物の登場に二人は息を飲んだ。
二人の反応にジョディは驚いた。
「シュウを知ってるの？」
「バスジャック事件」
コナンが即答するとジョディはああといった顔をした。
「あの時ね」
「ブラックさん誘拐事件」
「え？」
ジョディが驚きの声を上げる。
「ブラックさんがいなくなった所に車で通っていったでしょう？それに俺達の車の後を追っていた」
「その短時間でオレだと断定したわけか」
秀一が感心したように言う。
「あなたの雰囲気は独特ですから」
苦笑してコナンは言った。
その間も哀は何処か怯えた様な目で秀一を見ていた。
「灰原、どうしたんだよ？」
ほかの人間に聞こえないような声でコナンはたずねた。
「あの人…」
「赤井さんがどうかしたのか？」
「似てるのよ、気配が…」
「誰に？」

珍しく煮え切らない言い方をする哀を不審に思いコナンは眉を寄せる。
「……ジン」
「なんだって！？」
哀から告げられた予想外の名前にコナンは驚く。
「もちろん“似ている”だけよ？同じではないわ」
「そりゃあそうかも知れねえけど…」
（似てる相手が悪すぎるんだよ…）
とコナンは心の中で嘆息した。
「あの子、あなたの気配が彼に似ているのに気がついたみたいよ？」
哀とコナンの会話を盗み聞きながら二人に気づかれないようにジョディは秀一に話しかけた。
＜ちなみにコナンと哀は聞かれていないと思っていたがそこはＦＢＩというべきかバッチリ秀一とジョディに聞かれていた＞
「当然だろう。俺達は仮にも兄弟なんだからな」
苦虫を噛み潰したような顔で秀一は言う。
（当然ね…）
秀一の顔を見ながらジョディは思った。
ジンは組織の幹部にまで上り詰めたときに家族を秀一を残して全て殺してしまっていた。
秀一だけが生き残ったのはジンが組織へと入った後に生れた子供だったのとそのときはたまたま友達の家に泊まりに行っていたからだ。
「作戦はこっちのもう一度この図面を正確に調査してからまた伝えるから今日はもう解散だな」
ブラックが４人に告げた。
「それじゃあ、シュウ、また３日後に来てくれ」
「了解」
そうして秀一はまた組織の見張りに帰って行った。
それから一ヵ月後ついに組織との対決の日が訪れる…

第六話　切り札（後書き）

……作者より
本っっっ当にお久しぶりです！夏みかんです！
うわっ、この前の投稿いつだよ！ってな感じですね…。
皆様覚えていて下さってますか？
秀一の生き残った理由がおかしいなど苦情は多々あると思いますが
その辺はご勘弁を！
じ、次回はいつかな…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0014a/

誓約

2010年11月15日10時08分発行